

2022年6月19日（日）「復活のいのちを与える御霊」

ローマ 8:11

イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬべき体をも生かしてください。

今日は、当教会にとりまして初めての「召天者記念礼拝」となります。ここ数年の間、私の中で実施したいと願ってまいりましたが、ようやく実現に至りました。たまたまではありますが、当教会の初代牧師であった奥村修武の召天 20 周年にも当たりますから、タイミングとしてよかったのかもしれませんが。過去の歴史を遡りながら、この教会と関わりを持っておられた召天者の数を数えてみたところ、13 名おられることが分かりました。皆様の尊い人生を振り返るとともに、私たち自身の将来にも思いを致す時となれば幸いです。誰もがやがてこの地上の生涯を終えていくこととなりますが、そのとき私たちの存在はどうなるのか、何を信じて最後の息を引き取ればよいのか、この人生の意味とは何であったのか、このような問いを自らに投げかけつつ、聖書が教えている真理に耳を傾けたいと思います。

この礼拝のために示された一つの聖書箇所がありました。それは、ローマ 8:11 というところで、イエス・キリストを信じた人に与えられている約束、その人の内で起きている新しい現実が豊かに語られています。もう一度この箇所を読んでみましょう。

- ① イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、
- ② キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬべき体をも生かしてください。

ここでは大別して二つのことが教えられています。第一に、「信じる人の内に神の御霊が宿る」ということ。第二に、「その御霊は復活のいのちを与える」ということです。これらのことをもう少し丁寧に見てまいりましょう。

#### ① 信じる人の内に神の御霊が宿る

実は、11 節に至るまでに、8 章では一つの鍵となるテーマが扱われていました。これなしに今日の箇所を理解することはできません。それは、1 節の「キリスト・イエスにある者は罪に定められることはありません」という内容です。キリストを信じた人は例外なく、「キリスト・イエスにある者」となった、そしてその人は「罪に定められることはない」と。著

者パウロは、「死」の問題を扱うとき、「罪」について考えないわけにはいかないと言います。これは聖書の冒頭から呈示されてきた問題であり、「人はどうして死ぬのか」という存在論的な問いに答えています。私たち人間は潜在的に死を恐れる。自然現象であるはずなのに、どうしてこうも死に抗おうとするのか。例外はあるものの、老いを嫌い死の訪れを一日でも遅らせたいという感覚を持つ人がほとんどではないでしょうか。

私は最近、生きている間に読みそびれていた名著にふれておきたいと思い、手塚治虫の『火の鳥』という漫画を読んでおります。日本の黎明期れいめいに始まりますが、冒頭から「永遠の命」を追い求めて「火の鳥」を探し続ける人間たちの姿が描かれていきます。「火の鳥」の生き血を飲めば不老不死の体を手に入れることができるというのです。死の際にある仲間のために火の鳥を捕えようとする人、自分の老いの現実が受け入れられず部下に火の鳥の捕獲を命じる人……。手塚治虫が宇宙的な構想をもってこの作品に取り組んでいたことが分かりますが、そこには古今東西を通じてどうしても死の問題を乗り越えられない人類の姿が描かれているとも言えるでしょう。

ローマ書を書いたパウロは、死の問題は罪の赦しによって解決に至ると言います。死とは、神との関係が断裂したところにもたらされたものであり、その断裂は罪に起因している。神との関係を失った人間は、永遠に生きることができなくなった。それなら、罪の赦しを実現すれば、死の問題は解決するのではないかと。神が永遠に生きるお方であるならば、もう一度その神の許に帰っていくとき、人は永遠のいのちを持つ存在になる。これが聖書の教える「いのちの原理」です。

## ② その御霊は復活のいのちを与える

では、その「永遠のいのち」とは、いつ如何なるタイミングで、どのようにして得ることができるのか。それは、罪の赦しを与えることのできるイエス・キリストを信じる瞬間です。この「永遠のいのち」は、死後与えられるかどうか分からないようなものではなく、現在この地上で生きている時に信じる人に価なく与えられるものです。「信じる人の内に神の御霊が宿る」ことによって、その人は永遠のいのちを持つようになる。

私は、残念ながら、先に召された13名の方の信仰の証を聞く機会はあまり持つことができませんでした。しかし、一つははっきりと言えることは、彼ら一人ひとりが「キリストにある者」であり、「罪に定められることのない」存在に変えられていたということです。その根拠となるのが、彼らの内に宿っていた「神の霊」です。11節では「**イエスを死者の中から復活させた方の霊**」と言われている。神は人を死から甦らせることがおできになる。キリストは十字架で死んで後、確かに新しい命に復活された。キリストを復活させたと同じように、神は信じるすべての人をも復活させてくださる。私たちが召天者について信じてい

ることとは、このことなのです。

ここに集われたすべての人に向けて、聖書は「あなたはキリスト・イエスにある者ですか」「神の御霊を持っていますか」と問いかけています。もし私たちが神の御霊を持っているのであるならば、先に召された人々と同じように、御霊の力によって復活させられるでしょう。そして、全員が永遠の神の国で再会することになるでしょう。

人の人生は千差万別であり、地上で肉体に負った病の数も異なれば、死に方も違います。私の父は、私が生まれたその時に腎不全となり、彼が健康な姿を一度も見たことがありませんでした。それでも、私が23歳になるまで生き、人工透析をしながら教会形成をする背中を見せてくれました。彼にとって、肉体に負った「病」という刺はどんなに不快であったことかと思います。C型肝炎、肝硬変、脾臓の膨張、手根管症候群といった、数え切れないほど多くの副次的な病が伴っていました。しかし、彼は信仰によって生き生きとしていました。どんなに肉体的に病んでいたとしても、永遠のいのちを持っていたからです。神の御霊が彼の内におられたのです。そして、その御霊によって自分は必ず甦るということを確信していました。復活という出来事は、「新しい肉体」への甦りであり、かつての病巣だった体とは全くの別物が与えられます。それは、朽ちることのない栄光のからだで、若さに若さが増し加わり続ける、まさに神のいのちに漲るものです。私たちも、今信じるならば、永遠のいのちの保証として、この御霊が与えられます。

**聖霊は私たちが受け継ぐべきものの保証であり、こうして、私たちは神のものとして贖われ、神の栄光をほめたたえることになるのです。(エフェソ 1:14)**

ここで「保証」と訳された言葉は本来「手付金」という意味であり、私たちが高価な物を買うとき先に一部のお金を支払ってそれを押さえてしまうことを表します。御霊を持つとは、「復活のからだ」が与えられることを神が保証してくださるということであり、この約束は決して破られることはありません。

私たちが死の際に思い出したいこととは、自分には御霊が与えられているということです。では、その御霊が与えられるために、具体的にどう祈ればよいか。主イエスと一緒に十字架に架った強盗の一人のことばを同じように唱えてみるとよいでしょう。

**イエスよ、あなたが御国へ行かれるときには、私を思い出してください。(ルカ 23:42)**

人生の最後の最後まで、永遠のいのちを得るチャンスはあります。しかし、それを得る日はできる限り早い方がよい。今日でも、それをいただくことができます。そして、「御霊を持つ者」として残された人生を歩み抜くならば、永遠の神の国に入ることが約束され安らかな生涯を送ることができるでしょう。この祝福にすべての人が招かれているということをお伝えさせていただきます。

【祈り】

いのちの主よ。この教会と関わりを持ってくださった皆様のことを覚えつつ、召天者記念礼拝を守っております。この礼拝に参加してくださった一人びとりを祝福してください。先人たちが歩んだ信仰の道を、私たちも歩み抜きたく願います。主イエスをご自身をささげることによって私たちに与えてくださった永遠のいのちを、終わりの日までしかと握りしめていることができますように。そして、私たちの大切な人々との神の国における再会の時を待ち望ませて、確信を増し加えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
罪によって壊れた神と人との関係を、御子のいのちによって修復し給うた、父なる神の愛、  
信じる者に御霊を与え、ご自身ものとなし給う、主イエス・キリストの恵み、  
人を神の目にかなう者となし、終わりの日の保証となり給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。